

(Japanese Academy of Learning Disabilities)

# 日本LD研究会会報

第6号

事務局：長瀬総合療育研究所内 〒164 東京都中野区東中野5-5-10 R.H.S2F  
TEL&FAX. 03-3360-1855

## 思春期の子どもの 学習障害について思うこと

神戸大学名誉教授

坂本 龍生

現在、LDに対する研究の多くは幼年期、学童期の子ども達に対象が焦点化されている。LDについてはどの年齢が一番大事だという決め手がある訳ではなく、むしろ生涯を通じての課題といえる。しかし、思春期以降のLDの実態や教育の在り方に関する論議は、現状では驚くほど少ない。幼少期に比べて思春期になるほど、あらわになる問題の要因が複雑で多様化するためであろう。

わが国には現在LDに関する研究ジャーナルがないので海外誌に頼るしかないが、例えばAJLDの研究動向を最近の2～3年に限って展望しても、明らかに青年から成人に関する報告の多いのが目立つ。つまり如何にしてLDを克服して社会人として自立出来るようにするかについての基礎研究や問題の探索にかなりの重みがかかけられていることがわかる。勿論、歴史の違いがあるから、わが国でもすぐにといい訳にはいかないだろうが、LDに対する関心がもう少し思春期以降の年齢対象に集中しても良いように思える。

先日、福岡市の郊外にある全国でも唯一といっ

てよい軽度発達遅滞を中心にした高等養護学校を参観した。この4月末には、皇太子殿下のご来観もあって、学習活動の様子が広く電波にも乗った。一番心打たれたのは、100%社会人として自立していくカリキュラムへの工夫である。全寮制で職業訓練がかなりの部分を占めてはいるが、教科の枠にとらわれず、個別に社会人としてのパーソナリティの育成に非常に力が注がれている。こういう教育形態にありがちな厳しい躰け型を少しも感じない、のびのびとした教師と生徒の関係がとても印象的であった。校名も通称「福岡高等学園」と呼んでいる。LDの教育とか、そういう趣旨に則って設立された訳ではないけれども、むしろ思春期のLDの指導原則や方法を沢山含んでいるように思えた。今の中学、高等学校教育の現場でLDの理解を浸透させていくということは並大抵の事ではないが、それゆえにこそ思春期のLDと思われる生徒への研究と実践が増えることを願うと共に、教育システムとしてこういう公的な形態についての検討が進むことを祈って止まない。